

アートで心を表現する –心を伝える驚きのアート–

佐藤宏道 大阪大学医学系研究科認知行動科学 教授 sato@vision.hss.osaka-u.ac.jp

講演会報告書

33期 安居院（記）

講演会の司会は、33期の小林 猛さんが担当され、始まりと最後の締めをされ引き締まった講演会だった。

講演会は総勢 330 人で近年まれにみる大盛況となった。先生もいつものように、優しいお人柄がにじみ出た柔らかな語り口で、丁寧に説明して下さった。そこここにユーモアがあって、とても気分良く講義が進んだ。

途中、閑話休題で錯視に関するテレビ番組の紹介もあったり、聴衆を飽きさせない工夫が見られた。

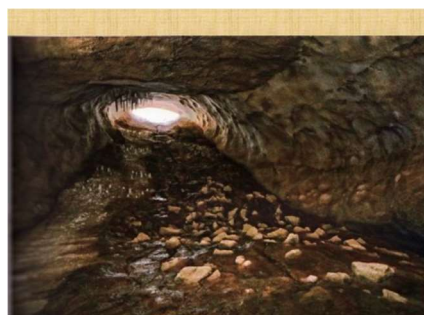
なにより、講義内容が素晴らしく、普段知らない話が満載で、大変勉強になり、視野の広がりを感じることができ、今後の鑑賞にも幅が出来、得をした気分になった。

まず、人類の歴史から説き起こされ、二足歩行ができるようになり、脳が発達、前足が手になって、表現することを覚えた。



1. 先史時代洞窟壁画

人類の歴史とクロマニヨン人による4万年より近い時代の壁画：ラスコー洞窟など



ラスコー洞窟内から見た入り口



ラスコー洞窟の入口



ラスコー洞窟
(15000年前)

最初の絵画は洞窟壁画であり、狩猟の豊穡を祈るためのものであった。

わざわざ山の中腹にまで登って描いたのだ。

昔はパラパラ漫画のように松明の光を順番に当てていき、描かれた動物が、あたかも動いているように見えた筈とのこと。

ラスコー洞窟の発見談も、面白かったし、ツアーの待ち時間に岩に落書きをされた中ハシ先生のエピソードや、運転手にバスの中を描いたスケッチでチップを挟んで渡された話などリアリティがあってとっても面白かった。

2. 絵画の歴史

現代までの西洋美術の流れ



レオナルド・ダ・ヴィンチ、「最後の晩餐」(1498)



ゴッホ 「糸杉のある小麦畑」(1889)

それから、西洋絵画の歴史が説き起こされ、レオナルド・ダヴィンチの「最期の晩餐」に表された遠近法や、「モナリザ」に表された空気遠近法の説明があった。

印象派のルノワールの「ムーラン・ド・ラ・ギャレット」やモネの「日傘の女」などにより、チューブ式絵の具の発明があり家の外で描くことが出来るようになった。

心に鬱を抱えたゴッホの絵の説明もあり、症状が重い時と軽い時で絵のニュアンスが違う。

ピカソの「アヴィニョンの娘たち」キュビズムの走りの作品も紹介。

ポロックの抽象画の紹介があった。

クレーやカンディンスキーの絵には、音楽性が感じられる。

これらの売れる絵が有名になっているが、一方には世の中に全く知られていない絵もある。

2. アール・ブリュット(art brut (仏):outsider art (英):生のアート)

アドルフ; ヴェルフリのこと

やまなみ工房(滋賀県甲賀市)のこと



アドルフ・
ヴェルフリ

(1864-1930)



正式にアートの教育を受けていない人たちの絵画

(アール・ブリュット) が最近見直されてきている。

スイス生まれのアドルフ・ヴェルフリは、悲惨な人生

であった。10歳に孤児になり、国営養護老人ホームに預

けられて育つ。児童労働者として働き、辛酸をなめる。1895年に、統合失調症患者としてベル

ンにあるヴァルダウ精神病院に移され、そこで残りの人生を過ごす。病院内ではかなり暴

れて孤立し、特に精神病に苦しんで激しい幻覚におそわれていたという。

その独房で描かれた作品集がある。ポスターの絵はニューヨークを描いている。ビルの外側にはカッパドキアのような岩山が、そして空間を埋めるかのような「鳥」の図案。上部には楽譜が、でもこれは5線譜ならぬ6線譜。画面構成も色遣いも尋常ではない。

日本でも“やまなみ工房”があり、発達・精神障がい者がバスで送り迎えされながら、自由にアート表現をしている。山下まさと代表を慕う鎌江一美さんの作品「まさとさん」の連作、「ウェディングドレスの私とまさとさん」というタイトルから、生き生きと陶芸作品作りを楽しんでいる姿が思い浮かぶ、先生も微笑ましいと解説されていた。



次に最新の研究結果として、過去の画家の作品の色分析が紹介され、赤緑色盲であったシャガールは、水色の使用頻度が高いことが判明。

一方、筋ジストロフィー患者たちの絵の中に同じ傾向を示す人たちがいた。

この色分析の話は、初めて聞く話だったが、とっても説得力があった。

コンピュータの時代になってやっとできた技術だろう。面白い試みだと感心した。なんか納得できる。

そこで、筋ジストロフィー患者の専門病院であった国立病院機構 徳島病院の説明があった。柏木節子先生との交流や、患者たちの絵の紹介があった。

4. 筋ジストロフィー患者の絵

絵画の色相解析

- ・ 国立病院機構 徳島病院
- ・ 川上和宏さんらの作品
- ・ 宗本智之さん

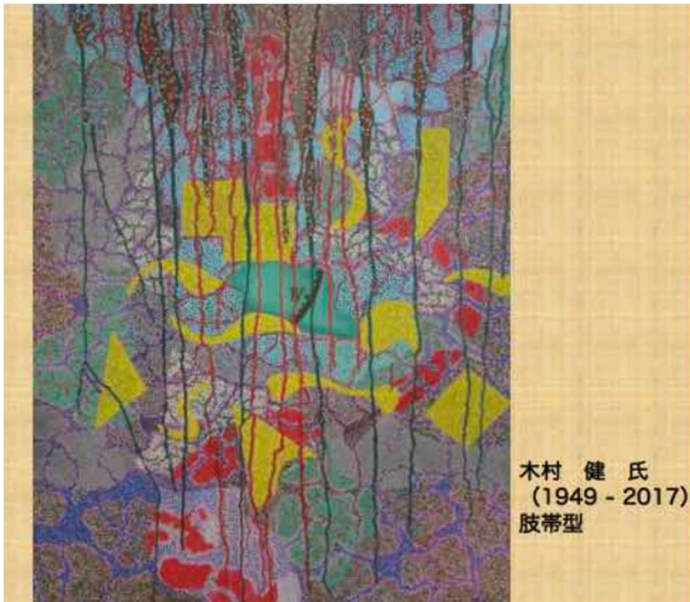
デュシェンヌ型筋ジストロフィー



川本和弘さんの作品も凄かった。自分たちを冷静に観察して、嫌がらず、恥ずかしがらず、本当の姿を表現している絵に、心の底から感動を受けた。

彼の眼には、素晴らしい世界として映っていることが実感できた。

愉しんで描いているのだ。



木村 健 氏
(1949 - 2017)
肢帯型



筋肉が動かなくても、表現したいという要求が湧き上がってくるのだ。不自由な体を、色々な補助道具を使って、アート表現する。

これらの患者さんたちは、絵も詩も音楽も得意だったという。

生きていることの喜びを、伝えようとしているのだろう。色遣いを見ても作者のうれしさが伝わってくる。友が死んだときの哀しみ、お風呂に入れるうれしさ、そんな感情が我々にも伝わってくる。



これらの作品が失われようとしている。

徳島病院からは、「桜が切られてしまった」との便り。総合病院への統廃合計画も上がっている。専門医がいて初めて、このような患者一人一人に寄り添う活動が出来ていたのに、医療費削減の波は、こんなところにも来ている。素晴らしい作品群が捨てられようとしている。我々は、裕福になってお金が増えたのに、文化活動やきめ細かいサポートのできる医療現場への援助を減らさようになってきたのだ。そんな政治に「ノン」を突きつけねばならない。もっと、暖かい世の中にしたいものだ。

5. どう考えるか 自閉スペクトラムという考え方

「自閉スペクトラム」とは「臨機応変な対人関係が苦手な、自分の関心・やり方・ペースの維持を最優先させたいという本能的志向が強いこと」を特徴とする発達障害の一種。

「少し変わった人」程度で済んで、問題なく日常生活を送れることも十分にある。

スティーヴン・ウィルシャー 写真記憶を持つ男

自閉スペクトラム特性が 視覚アートに与える影響

- 1) 細部への焦点化 (緻密・手を抜かない)
- 2) 視覚的記憶の再現
- 3) 多重視点あるいは俯瞰的
- 4) 反復繰り返し (しつこく続ける)
- 5) 表情認知の弱さ



これまで、見てきたように細かい作業を厭わないのが、患者さんたちの特徴だった。
スティーヴン・ウィルシャー(英国の建築画家・自閉症)のビデオを観たが、20分のフライトで、全てのニューヨークの情景を記憶することが出来、それを絵に表すことが出来る。

先生の話では、我々もだれでも脳にはイメージが記憶されるが、それを抑制する信号が出て意味付けされないものは、記憶から消される。

ところが、ウィルシャーのような一部の人はこの制御が上手くできずに、全て記憶してしまう。また、それを引き出せる能力や絵描く技術がないと、うまく吐き出すことが出来ない。

やはり稀有な才能なのであろう。

それに、日本の伊藤若冲もその絵のこだわりを見てみると、まさに超絶技巧である。ナンテンの実や鶏の“とさか”などの細密描写は尋常ではない。との説明もあってなるほどと感心。

良いところを、取り出して評価していく態度が必要だろう。障害があつて可哀想と思っていたのでは、お友達になれない。お前はここが優れていると、長所をほめる。短所は目をつぶる姿勢がないとお友達にはなれない。

特に、精神障がい者に対する偏見は、この国ではまだまだ無くせそうにない。

鑑賞者として、作品に向き合ったとき、この作品の伝えなかったもの、作者の「どんな心の表現」を感じたのか、徹底的に向き合うことから、その人格を愛で、その作品に感動し、作者を受け入れる大きな心を持てるようにしたいものだ。

感動的な A・ワイエスの「クリスティーナの世界」の解説で佐藤先生にほれ込んだ小林さんの尽力で、本講演会を実施することができた。米国メイン州の片隅で、“気高く生きる障がい者(クリスティーナ・オルソン)”を見つめ続けたワイエスの繊細で暖かい感性が共感を呼ぶ。人間は、“総てあるがままで美しい”。それが伝わる名作だ。先生もそれが絵画から伝わる「心からのメッセージだ」とおっしゃっていた。

おまけ ポスター、先生の話のエッセンス、A・ワイエス「クリスティーナの世界」

大阪大学大学院医学系研究科教授

佐藤宏道 先生

芦屋川カレッジ学友会
五月の講演会



遊びをせむとや生まれけむ
戯(たはぶ)れせむとや生まれけむ
遊ぶ子供の声聞けば
我が身さへこそゆるがるれ — 梁塵秘抄 —

人はみな、始めから備わっている創造力が、
遊びの中で次々と開花していくのだ(佐藤)



日時 5/13 月 場所 芦屋市民センター
10:00 ~ 11:30 (開場: 09:30) ルナ・ホール

絵画は、時代・土地・画家によって様々なスタイルが変化する。
それらの絵画作品に表現されたものは何か、訴えかけるものは何なのか。
言語ではなく、アートによって伝わるものがある、伝えたいものがある。
表現手段としての絵画と心との関係について、職業美術家以外の作品を中心に
表現者としての画家の“人間の根源”に迫り、豊穡なるアートの世界へ誘(いざな)う。

講師プロフィール
略歴 慶應義塾大学文学部心理学専攻卒業 所属学会 日本神経科学会 米国神経科学会
大阪大学医学研究科修了 日本生理学会 芦屋美術会
大阪大学健康体育部教授 日本視覚科学フォーラム
大阪大学大学院医学系研究科教授 ~現在に至る

研究内容 芸術と脳(基礎脳科学、神経科学、実験心理学、芸術実践論)
大脳皮質視覚野の機能構築と情報統合メカニズムなど、視覚系の神経科学が専門
神経美学
お問い合わせ: 学友会 中野 090-7875-0647